



流れる「連綿かな」と 音楽、そして建築

現代中国学部 木島 史雄

最近『パラゴネ』という本が出版されました¹⁾。「パラゴネ」とは聞かない言葉ですが、これは西洋で行われた美術ジャンル優劣論争のことを言います。つまり西洋では、彫刻や絵画などの間にジャンル区別とその優劣の意識が強かったことを示しています。しかし考えてみれば、彫刻と絵画がいつも截然と区別されて鑑賞されるわけではありません。バロック宮殿では、建築の中に絵画が掛けられ、その前に彫像が置かれてあって、時にバロック音楽が流れていたかもしれません。つまり全体としてバロック体験を現出させることが期待されているでしょう。とすれば、むしろ考えるべきはジャンルの優劣ではなく、ジャンルをいかに有効に組み合わせるかという工夫にあると言えます。

さて今回の特集テーマは、「世界で知られている『日本』」でした。上に述べたような鑑賞体験の視点から、「書（お習字）」を考えてみようと思います。

知り合いのドイツ人日本美術研究者のMさんは、研究のため来日して、「連綿かな」に魅了されたと話してくれました。一般に美術作品は制作者の手を離れると、「完成」として固定されます。その点は「書」も同じなのですが、違いもあります。「書」は鑑賞する人が、制作を追体験できるのです。ひらがなの場合は筆順と言うほどのこともありませんし、漢字も小学校で習いましたね。筆順を知っていると、文字をみただけで、その文字を出現させるべく作者が

作り出した時間が、鑑賞者の中にも流れ始めるのです。筆の動きを追体験すれば、そこにリズムが生まれます。折れ曲がる部分は強いアクセントとなり、かすればサビでしょうか。太く濃い線は強さのあらわれでしょう。隣り合う文字との関係はハーモニーにもなるでしょう。そして、記されているのは文字ですから、そこにコトバが付随します。コトバがあれば音声も頭の中に流れますし、意味や論理も生じます。筆を動かす腕の動きもトレースできますね。つまり「連綿かな」を見れば、鑑賞者の中に流れが生じ、リズムとハーモニーとメロディーとコトバと意味と身体感覚がそこに浮かび上がってくるのです。

油絵を見ても、画家がどういう順番に色を載せていったのかは判りません。彫刻を見ても音楽は流れません。これらは、瞬間で完結するフラッシュ型芸術と言ってよいでしょう。それに対して書は音声と意味と視覚と身体動作が流れるストリーム型芸術なのです。

そして逆に「書」が音楽と違うのは、完成形が提示されているということです。一度きりの体験として消えてしまうのではなく、いつでも我々はストリームを流し始めることができます。再生装置のおかげで、音楽の方も鑑賞者に身近なものになってきましたが、音楽再生はあくまで他者の演奏をたどるのであって、速さを調節したり、気に入ったところを繰り返したり、全体から部分へとクローズアップしたり、息を止めて流れが始まるのを待ったりというようなことができません。しかし「書」の鑑賞では、それが思うが儘です。

このような特性を持つ「書」ですが、実は東洋に特有の芸術ジャンルなのです。西洋にも読みやすく、速く、きれいに記すための書字法（カリグラフィ）やタイポグラフィはあります。しかし芸術として評価されることはありません

1)『パラゴネ — 諸学芸の位階論争 —』ベネデット・ヴァルキ著 2021年 中央公論美術出版



「寸松庵色紙」東京国立博物館蔵

出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

し、鑑賞の蓄積もありません。とすれば「書」という芸術ジャンルを育ててきたことは、東洋の誇りといってよいでしょう。とりわけ仮名で和歌を記した古筆は、ストリーム芸術の洗練の局地といえるでしょう。

また建築を「凍れる音楽」と表現することができます。たしかに三重塔にはリズムが感じられますね。しかし塔の出現過程とその緩急を体験したり、意味を実感したりすることはできません。ところが書は、凍って固着した音楽ではなく、芸術のエッセンスが時間の中で立ち現われ、表情を変え、うつろうさまを、感じさせてくれるのです。

Mさんは、いくら勉強しても、筆順や音声の流れを自在にトレースするのは難しいといっていました。でもみなさんには割と容易なのではないでしょうか。あとは紙面上の線からリズムやアクセントや表情をくみ取る技術を習得するだけです。

こんなに魅力的な芸術があることは、世界であまり知られていません。「世界で知られている『日本』」ではありませんが、「世界で知られてほしい『日本』」としてご紹介しました。